

令和7年度第1回地域活動支援センターA型の機能に関する懇談会 会議録

- 1 開催日時 令和7年1月27日（木）午後1時00分～午後3時00分
- 2 開催場所 川崎市役所本庁舎13階 1301会議室
- 3 出席者 (委員) 大窪委員、鈴木委員、島津委員、瀬川委員、堀委員、原島委員、江口委員
(敬称略・名簿順)
(事務局) 山寺課長、木下係長、五十嵐主任
- 4 欠席者 村山委員、松園委員 (敬称略・名簿順)
- 5 議題 (1) 地域活動支援センターA型事業実施状況について
(2) 地域活動支援センターA型の機能強化について
(3) モデル事業の取組について
(4) その他
- 6 傍聴人の数 1人
- 7 発言要旨

（1）地域活動支援センターA型事業実施状況について

山寺課長 大窪委員、お願いします。

大窪委員 二つあるのですけれども、まず1つ目が、こちらの資料にもありましたとおり、令和2年以降、コロナの影響で利用者さんが少なくなってしまった、登録者の皆さんも少なくなってしまったというお話をしたけど、それ以降は、なかなか伸びが鈍い形になっているというのがどういうことなのかなと一つ思ったことです。

あと2つ目が、私の家内も、私も当事者同士で結婚しているんですけども、全然調子が悪くてなかなか、私も家内も来所というか通所はなかなかできないんですけど、それでも、やはり夕方とかお昼とか夜とかに電話をして、ちょっと話を聞いてもらうことで不安の解消につながっているのかなと、ありがたいなと思っています。

山寺課長 コロナ以降、利用者がなかなか戻ってこないという話ですけど、何か、ちなみに、大窪さんのところのオリオンの状況としては、それについて何か言えるようなことや、こんな傾向がありますとか、こんな状況ですというのではありませんか。

大窪委員 私はなかなか、やはり宮前区から多摩区に引っ越してすごく遠くなっちゃって、オリオンに通う機会があまり、今、ない状態なんですけれども、その代わり、3か月に一遍とか、来ていただいているんですね、訪問。そういうことですすごく助かっているんですけども、オリオン、私、直接行って、目で見てというところが、今、できていないんですけども、

どうかな。オリオンはほかに比べると、あまり、たまに行ったときとかでもいっぱいいるなという感じがするのです。ほんのまれに行つたときの感想なんですけれども、その辺がほかとどういう違いがあるのかということもやっぱり気になるところかなと思っています。

山寺課長 ちょうど令和6年度くらいから少しづつ人数が回復傾向にあるみたいな話もありましたけど、そういう傾向が多少あるというところで、こんな感じですよね。
ちなみに、はるかぜさんとかアダージオさんはどんな印象を持っていますか。

島津委員 コロナ禍以降、居場所を求めている方たちは、ある一定程度の人数が日中から夜にかけてこられていらっしゃるかなと思うんですが、コロナ禍で来られなくなった方というのが結構電話相談のほうに移行されているような印象です。

夜間については、コロナ前というところがちょっと比較は、私は分からぬのですけど、ただ、仕事、障害雇用でお仕事を近隣の施設で行われている方たちが休憩で来るとか、帰宅前に一回来るということで、夜間は二、三名が7時から7時半くらいで帰られるというようなところは、固定の方がいらっしゃいますが、そのほかで来るというところはなかなかないですね。

瀬川委員 アダージオのほうは来られなくなった方々は、来なくても自分で何か時間を使える方法を見つけたのかなという形で、割ともう退会する方もいらっしゃったりするところで、その間に通所じゃない違う方法で日中活動するという方が増えたんじゃないかなというふうに思っています。

山寺課長 ありがとうございます。
ほかに御意見、御感想はいかがでしょうか。

江口委員 A型の地活の懇談会というのに、私も去年まで精神保健課にいたので何となくこの流れというのは分かってはいるつもりではいるのですけれども、保健所のデイケアを昔やっていて、いろんな人が集まってきたけど、今は本当に数人しかいなかつたり、一人二人だつたりという同じような状況かなと思っていて、必要な社会資源というのが広がってきていて、A型としての必要性というのが違うところでも担えるようになってきたというところで少なくなってきた部分もあるでしょうし、あとは、コロナになって、オンラインでつながるということが、皆さん、当たり前になったので、そういうツールを使ってほかのところでつながれるようになったというところが一定程度あるんじゃないかなと思っています。

今、区役所のデイケアをどういうふうにしていくかというところは、役所の側としての課題として痛感はしている部分だったりはするんですけど、やっぱりそこ、区役所のデイケアは別にお金、採算を取るためにやっているものではないので、そういった意味の居場所という意味ではいいのかなと思うんですけれども、そういったところで、A型さんの強みというのがどんなところかなみたいなところを、多分それぞれの事業所の強みがこんなところですよみたいなものがいろいろ出てくるといいのかなと。

今回支援困難別件数というのを出してもらっていて、はるかぜさんがいっぱい支援しているということで数字を挙げてもらっているんですけど、多分、これ、いっぱい支援した

からいいかということじやなくて、A型の強みはこんなところ、こんな支援ができるよみたいなところを、多分この資料で見ていくところなのかなと思っていて、事業所さんごとの数値を見てみると、訪問も結構出でていているところもあれば、手紙とかメールとかという形で、多分それぞれの利用者さんに合わせたアプローチの仕方をしていただいているんだろうなとは思うんですけど、やっぱり区役所とか相談支援事業所ができないで、地活だからできることみたいなところを、もう少しもんでいけるといいのかなと。

山寺課長 ありがとうございます。

ほかに御意見とか御感想とか、いかがでしょうか。

では、次の議題に進ませていただきます。

(2) 地域活動支援センターA型の機能強化について

木下係長 ちなみに令和6年度のこのフロー図も今少ないという話があったところの3件のお話なんですが、具体的なところでは、ゆりあすにお尋ねしたんですけど、地域移行支援の1件は、もともともうすごい昔にゆりあすに登録していた方みたいだったんですけど、ほとんど新規みたいな状態で、生田病院から依頼があって、グループホーム入所がもう決まっている状況で、そこから関わりの依頼があってスタートしたと聞いています。

入院中から病院に行って、出願、調整を行って、計画相談を行ってというところで、ゆりあすとつながって、通所も続けている方というふうに伺っています。

地域定着のこのお二人は、お一人はグループホームを卒業して自立生活援助を使っていたんだけれども、もうちょっと支援が必要というところで、そこから地域定着支援のサービスにつながったというところらしくて、緊急時の連絡先確保というところが必須だなというところで定着支援になったというふうに伺っています。

もう一人も、地域定着のところで、言語化して援助希求することが難しい方で、日常の緊急訪問とかというところが必要な方で、これも地域定着支援が必要な方だというところで、支援されていたというような話を聞いています。

ゆりあすもこの地域定着支援を結構大変というか、体制的にもなかなか誰でも入れるところではなくて、地域定着支援は結構、対象者を少し選んでいるところもあり、そういう大変さというところもお聞きしているところではあるんですけども、補足でございます。

江口委員 仕組み的に、A型にオーダーが入ることというのではないという認識でいいのですか。

木下係長 補助金型はそもそも定着を取っていないくて、学校だけです。

江口委員 移行も含めて、移行は住居が決まっていれば地域型だし、決まっていなければ基幹だから、もともと通っている人じやない限りはA型が地域移行に絡むということ自体がそもそもできないスキームになっているという認識で合っています。

もともと自分のところに通っていた人がちょっと長く入院しちゃってという、そういうレアなケースぐらいしか地域移行は絡まないですか。

島津委員 A型したら、恐らく機能的なところを考えると、そうなると思います。

はるかぜは逆に市外病院というところでは、地活とは全く変わらない、違う人という形

なので、そこは関わってはいますが、なかなか移行もプレ支援からになってくるので、それこそ10年、20年入院されていた方というところが正直多いので、そこまで移行に特化してというのがなかなかやれないかなと思っています。

今、現状18年をフルで動いていますけど、やっぱりそこが限界かなと。結局地活のA型をやりながら、計画相談、地域移行というふうな形で動くとなると、やっぱり7人いますけど、その中で実際、地域移行に動けるのが4人しかいないくて、でも、日々のシフト上の問題もあり、訪問もあったりすると、なかなかそれ以上、動くことはちょっと正直はるかぜでも厳しいかなと思っています。

江口委員 その後、基幹さんとかはガンッと来るじゃないですか。

事務局 そうですね。

江口委員 それで何かもうちょっと分担できたらいいなとか、相談支援の会とかで、そこの地域移行全部住所不定は回ってくる、ちょっと大変だという話は聞きますけど、その辺りの認識とかは。

島津委員 なかなか今の相談支援体制を考えると、住所が決まっていなくて地域移行する方にA型を絡めていくというタイミングだとかというものが、今、島津委員のほうからもあったようにプレ支援から入って、空いた人の移行、タイミングというところとか、伴走する、だとしても、その辺の難しさを感じることは多いですね。

反対に、居住地がある程度組まれた中で、そこが空くまで入院させてもらえるわけじゃないから、その希望地に住めない場合となると違うところ、市外も含めてとなるとA型さん、いや地域型もそうなんですけれども、ケースによってタイミングを見計らうのはすごく難しいなというのを感じます。

一緒にやっていると心強いなという気持ちはありますけれども、タイミングと、どのくらい伴走してどんな形のものをA型さんにお願いしていくかみたいなところが、計画相談をやって、いつもやっぱり人数的に今は受けられないとなれば、なかなかどこの部分というのが本当に、個別制度がありますけれどもちょっと難しいなと思うところと、何か一緒にやれたらなと思うところというのを感じことがありますけど。

江口委員 何となくこれはおまえが言うかという話になるんだけど、この地域移行の資料を見たときに、A型、何だ3人しか支援していないのかみたいに見えちゃうんですけど、そもそもできないスキームになっているのかなというところを考えたときに、じゃあ、どういうふうな流れがいいのかなとか、できることは何だろうみたいなところへシフトしていったほうがいいのかな。

地域移行の中で、担うべき役割は、地域移行の支援をするところではない部分という形で、多分今、川崎市で整理されているので、そこがどういうふうにつながるか。おっしゃったとおり、そこの住めるわけじゃないところで、じゃあ、例えば、川崎に住みたいというからアダージオさん一緒にやりましょうと言ったけど、実は全然違うところに行っちゃったということは全然あり得ることだとは思うので、この難しさというの、多分地域移行に、これだと地域移行にしばられてしまっているので、そうやって見るとちょっと苦し

いのかというのは、聞いていて思った部分かというところではありますので、そこが間違っていないかというのを確認させていただきました。

あとは、これはおまけでと言っていた37ページの（4）その他の事業は、去年私が始めた事業なんですけど、全然その他じゃないので、ぜひ……。

事務局 そうですよね。

江口委員 はい。余計な話ですけど、前向きに御検討いただければ。

島津委員 うち、既に入所訪問支援事業を、職員、ピアスタッフが1名ずつ、もう動いています。

江口委員 ありがとうございます。

事務局 この地域移行、地域定着支援事業の話をちょっと例として出したんですけれども、月報で支援困難者として通っている中にも退院直後で支援が必要な方というのは入っておりまして、丁寧な関わりが必要な方というところに分かりやすく想定されるケースとして、退院てきて生活が定着するまで支援が必要で、さらにそういった居場所がある利用者さんだと、なお経過がつかみやすいところはあるのかなと思っていて、退院後支援というんですか、そのちょっと分かりやすい関わりの事例として出させていただいたというところがあるんですけども、なかなかスキーム上、実際は難しいというところは、承知しているところではあるんですけども。

江口委員 素朴な疑問なんですが、A型地活は精神に特化している地活という認識でいいんですね？ 私も全部回ったわけじゃないので分からんんですけど、地活の中で拾える地域課題は多いですか。

何を言いたいかというと、この間、相談支援事業所連絡会で宮前区内の事業所の話とかをしたんですけど、やっぱり令和2年に比べて主たる対象像というのを外したおかげで、シリウスさんはもともと精神に特化していたところなのであまり変わりなかったんだけども、今まで知的支援障を7割、8割をやっていたところが、今、相談の7割が精神ですというようなところがやっぱり増えているんですよね。

そうなったときに、精神の特化したところとして、区内の相談支援事業所のバックアップとか、そういうこととかがちょっとできないかとか、それは基幹の役割でしょうと言われればそれで終わりなんんですけど、それにとどまらず、その強みというところを生かしてみたりとか、地域課題というところを、もし退院てきて、こんなものがなくて困ってしまうとか、やっぱり退院てきてすぐはこういうところでみんなつまってしまうというようなところの積み上げみたいなものがあるんだったら、それはやっぱり地域課題だし、それをクリアするために何かできないかみたいなところで、例えば、協議会の、今各区、それぞれ協議会はすごい小さくなってしまっていると思うんです、令和2年のときとかに比べると。

そこにちょっとモデル的に入って、区の中の課題を共有して、それを何か一緒にできないうのが、例えば、A型さんが入ることで、もう少しコアな部分、精神に特化しちゃう可能性もなくはないし、引っ張られちゃう可能性もなくはないんですけど、そういう

たアプローチとか、こういうふうにやっていきましょうみたいなものもあってもいいのかというの、この資料を見たりとか、今まで自分が区の中でやっている中で感じた部分だったりします。どこか適切なところがあれば、そこでもんでいただいて。

事務局 区の協議会のメンバーとか？

江口委員 協議会の企画運営会議というのがあって、その中でこういうふうに地域課題があるよね、それに向けて、事業所連絡会とか、定例会でこういったことを取り組んでいきましょうみたいなことをやっているわけなんんですけど、そこのピックアップのところに一緒に入ってもらって「うちちはこんなことできるよ」とか、「こんな問題解決できるよ」なのか、「このところはやっぱり課題だから、区として考えようよ」とかというところに御助力いただけすると、もう少し地活ならではの視点というか、多分相談支援事業所とリハと区で見方がある程度同じ目線というか、変わって、事業所ならではの見え方というのがきっとあると思うし、フリースペースがあることで聞こえてくることというのもきっとあると思うので、そこは強みなんじゃないかと。

その強みをどう生かすかと考えると「そういう地域課題を個の声を聞いたときにこういう声が上がったんだけど、これは皆さんのがところで課題になっていませんか」みたいな波紋を広げる一つにはなるかというふうに思いました。ただ、実際にやるとなったら他の調整がいっぱい必要になるかとは思います。

堀委員 地域問題の抽出が、多分どの区も大変な部分になっているんだろうなと思うんです。その後で地域課題化したものの取組となっていくので、A型さんのほうのそういった居場所に来た方たちのささやきからというもので、何となくこんな話があったよというものを協議会に投げかけていただけると、またそれから地域問題、またそれを課題化してという、抽出の有効性の高い場所というイメージは本当に感じます。

江口委員 障害の種別によって異なる部分はあるかと思いますが、精神障害の人は、何かこれを言っちゃうと、また調子が悪いね、入院だね、お薬を増やそうかみたいになりがちで、言えない、言いにくいみたいなところがきっと生活の中であるので、そこをうまくピックアップして、我々の中にも認識として伝えてもらうというところでは、とても重要なところにいらっしゃるかと思います。

島津委員 いまのお話を聞いていて、はるかぜで何ができるんだろうと思ったときに、はるかぜの利用者さん、登録者さん、本当にまれに来られる方から、毎日、もう毎日通所する方までいるんですけど、南は川崎、北は多摩区ぐらいまでの方が来るので、そうすると地域課題を拾えるのかなと、印象としてですが、何かそれ区内の居住の方だけが来るのであれば、その区の課題は結構拾いやすいとは思うんですけど、みんなばらばら、ばらばらをしているところで、地域課題なのかなじゃないのかも私たちも分からない。

中原区のことは分かる、高津区のことは何となく分かる、宮前もちよつと聞いている限りは分かりそうだというところはあったとしても、川崎、多摩、幸となると、そこまでのこちらも情報収集も含めてしまないと、なかなか地域課題としてという視点で見られないのかなんて、現状を見ていると、フリースペースではそんな感じかなという印象です。

江口委員 別にカチッとやるというイメージではなく、何かそういうこともできないかなとか、そうやって意識するだけでも変わってくる部分は多々あると思うので、何かそういう役割もあつたりするのかなとか、その中で何かできないかというところの一つの話題でしかない。それをやってほしいとか、やりましょうとかということではなく、ただ可能性は何があるかというところでお話ししてもらえた。

堀委員 多分協議会に出す、今のフォーマットとかをつくるというイメージよりも、今、お話があつたように、いろんな区から来てもその方がどこの区に住んでいるか分かるのであれば、なにか一言でも、それが本当に地域問題なのかは協議会でもむでの、気軽に上げてもらえるようにしてもらえたうれしいなと思っていて、あくまでも、これはどういうことなのと思えば、聞きに行けばいいわけで、その区が。ただ、そういった意味で、負担がなく、何区の人がこんな発信したか、ほかの人もあるかもしれませんよみたいな、何か簡単な形、レベルということですかね。

江口委員 だから、その具体的な流れはちょっと全然考えなきゃいけないとは思うんですけど、そういうふうなものがあるとかだけでも、やっぱり居場所としての役割はA型以外にないと思うんです、基本的に。

あとは、窓の会さんとかそういうところはありますけど、基本的にはA型が居場所として川崎市が設定しているところになるので、ほかは就労に向けてとか、生活介護ですよとか、目的があるわけですよね。そういったところで居場所としてある必要性というか、そこできることというところで、こんなことできないかと思ったんです。できる、できないはまた。

堀委員 そういった可能性がある場所じゃないかなというところですね。

江口委員 そうです。

山寺課長 鈴木委員、何か御意見はございますでしょうか。

鈴木委員 江口さんがおっしゃっていたような居場所の機能とか特徴というのが大事だと思うんですけど、統計上、この近年のコロナ前、後、比較したときに、やはり居場所の機能としては、全体的にはもう縮小の方向はそんなに変わりはないのかなという状況だとはちょっと認識はしなきゃいけないのかなというのであるので、居場所というのも、一応ある程度の最小限の機能を維持しつつ次の認知度を上げたいのか、地域移行に絡むだとか、区内の多重的な支援が必要な人に関わっていくというのを、そのモデル事業のところでも関わると思うんですけど、そういうのにシフトしていくかないと、せっかく設置している意義が失われてしまうのは、お話を聞いていて思ったところではあります。

なので、自分はその部分しか今、思いついてはいませんけれども、あとは、要素として、ピアの部分とかが、今はるかぜぐらいしかA型で取り組んでいるところがないので、その次の展開としては、ケアをどういうふうにほかのA型が、あと、ゆりあすか、ゆりあすさんとはるかぜさんくらいしか、今、積極的にピアが動いているというところは感じられな

いので、その辺をどうしていくかというのも今後の課題に残しておく必要はあるかなというふうに思います。

山寺課長 ありがとうございます。

原島委員 地域移行・地域定着支援推進会議の担当をさせていただいているとおり、よろしくお願いします。

現状の障害支援体制の仕組みからすると、もう今おっしゃっていただいているとおり、A型が地域移行支援に携わるところはなかなか難しいかなというふうに思うんですが、地域定着支援ですね。退院後の生活支援のところで、相談支援センター職員さんも多忙でじっくりと関わることが難しい。うまく居場所の機能を活用するというお話をありましたけれども、精神保健のニーズは結構幅広いと思います。このアンケートの調査項目からもわかるんですけど、幅広いので、ニーズをうまく拾っていただいて、次の取組に反映していくというところでいいのかなと思うんです。推進会議や居住支援協議会において、居住支援について取り組んでいる中で、定着の安心感やなにかあったときの相談先があるというのは家主さん、不動産店さんが重視するところですので、精神障害により支援を必要とする方が安心して地域で住み続けることができるというところでは大きな要所となりますので、そういったところで少しアンテナを張って、お力添えいただきたいと思います。

山寺課長 ありがとうございます。

それでは、一旦次の議題に進ませていただいて、また、その後、御意見をいただければなというふうに思います。

(3) モデル事業の取組について

堀委員 アダージオさんからのほうから、ここの中にある11月に実施した南部3機関のところでは、相談支援事業所だったりとか、あと南部の場合、ラシクルさんがあるので、宿泊型の自立訓練の職員の方たちにも参加して聞いてもらって、本当にせっかく南部の川崎区に宿泊型があるのになかなかそこがつながっていないという状況が、知ってもらう機会になって、それこそ地域移行とかという中での川崎区にお住まいを進めていったりとかという方たちには、ラシクルに入居しつつもアダージオさんのほうに見学や体験というところでこういった場所があるというのは知ってもらったりだと、支援の一つとして入れ込んでいただけたり、提案していただいたりという、そういった社会資源の一つとして知ってもらういい機会だったかなというふうに思っています。

まだ1回しかやっていないので、全部が分かったというわけではないとは思いますけど、知る機会になっただけでもちょっと大きかったかなと思うので、今、中原区のほうでは、もみの木さんがあるけど、そこはるかぜみたいな形でちょっとずつラシクルのほうからも御相談じゃないんですけど、一緒に考えていくみたいなきっかけが増えていくといいなと思っています。

山寺課長 11月の何日頃にやったんですか。

堀委員 11月7日です。

山寺課長

そうすると、1か月はたたないけど、少し時間があったと思うんですが、その後、これをやったことによって、今、お話しいただきましたけど、使用機関同士、何かうまくつながりができたとか、軽く相談が入ったりだと、そういうのがあれば、より良いのかみたいには思いました。

堀委員

何か、当日のところでも知らなかつた分、こういった連絡とかさせてもらってもいいのかという御質問があつて、多分、地域のほうにラシクルを卒業してという方たちの予備的な形で、全委員さんが出席する機関というのではないので、そちらを、推測ですけど、中のほうを共有した形で、今後どんなふうにつながつていけるかというところを話してもらつているんじやないかという程度ではまだありますけれども。

事務局

いただいた報告の中で、カンファレンスがうまく使えてるかどうかというのは、いろいろ分かれるのかなというところがあると思うんですけど、これまでいろいろお伝えして、このモデル事業というのがカンファレンスに参加するというだけのものではないというふうに思っています。カンファレンスはあくまで入り口ということで、そこで顔の見える関係をつくって、より見解が一致していけばいいかなという意味ではカンファレンスかなと思っているので、今みたいな、事業所の紹介をするというような取組も含めて取り組んでいっていただければなど。そういう中で少しずつつながりができる、気軽にお互い相談ができるような、そういう関係ができるのが一番理想的なのかと思います。

堀委員

そうですね。精神カンファに区ごとにちょっと形が違うかもしれませんけど、私は川崎市幸区を担当していますが、幸区のほうの精神カンファはまず出たことがなくて、川崎区ばかりになつてしまふんですけども、どちらかといえば支援者支援の場という形で、もう支援者がある程度固定されている中で、中心にいる利用者さんに対しての関わり方だつたりというところの難しさ、こんな状況になつちゃつて、今どうしたものかというところを、また違う視点だつたり、先生も入つたりもしていらっしゃるので、医療面での支援のアイデアをもらう場というイメージのほうが強いんですよね。

その中で、アダージオさんに、はるかぜさんにつなげるという形で参加というのはすごくもつたいないなと私は思つていて、せつかく出ていただいているんだつたら、似たようなケースがあつた場合に「こんな感じでちょっとやつてあることがある」とかというようなポジショニングとかで参加してもらうというのも、意義が大きいかと。反対にこういった機能があるから、どちらにお住まいでも各区にはあるので、こういったものを社会資源の一つとして、ちょっと提案してみるといいのかもとか、こういったポジショニングで参加してもらえると、発信する回数が多い少ないではなくて、地域で生活する中での大きな社会資源として知つてもらえるというのを違つうのかというふうには思います。

山寺課長

ほかの委員の皆様、何か御質問、御意見はいかがでしょうか。

江口委員

今、堀さんがおっしゃつたように、区のカンファレンスと、支援者支援の側面がすごく強くて、多分計画相談とかしていると、ここにはこれを願ひます、ここにはこれをお願ひしますと明確な役割があるときは依頼しやすいんですけど、そうではなくて、これか

ら何かしていこうみたいなケースはどうしていこうみたいなものがすごくあるんですよね。

区役所は基本的に断れないし、相談支援センターも断ってはいけないし、ワンストップでと言われているので、そういうものをまるっと受け止めるというところで、でも、やっぱり区役所と相談支援センターだけでは難しいというような状況のとき、こんなことならできるかもよとか、結構うちだと中部地域支援室のほうでこんなことできるかもよと一緒にいやいや、三次機関なのにそんな出てこられてもと思ったりもするんですけど——でも、やっぱり手伝ってくれるのはすごく助かるんですよね。

そのような形で身軽にというか、「こんなことならできるよ」と言ってくれることだけでも、やっぱり支援者としては気持ちがすごく楽になるので、そういうたった関わりをしていただけだと嬉しいというのは、堀さんがおっしゃっていたとおりなので、私も同意します。

堀委員

ありがとうございます。

何か別なそこに関わるばかりじゃなくて、もう既に関わっている人たちにちょっと違う視点からの試行というような広いポジショニングで参加するみたいな形のほうが、A型さんがせっかく出てきていただいている意味が大きいんじゃないのかなと思うんですよね。

計画もいろんな方が関わっていらっしゃるから。つなげるばかりじゃなく、そういうたったポジショニングのほうが一緒に、気軽に考えていただけると、何か1か所機関が増えると心強いなと思います。

山寺課長

ほか、いかがでしょうか。

原島委員

では、すみません、感想ですが。ここに書いていただいたとおり、現状の運営で手一杯というのは理解できるんです。その一方で、アウトリーチというキーワードがあって、そのアウトリーチ支援もなかなか、例えば、相手のアウェーのところに、一人ということはないと思うんですけど、そういうふうに取り組むのはちょっと怖かったりとか、不安だったりとか、もちろんそれは経験が浅いほどそういう不安というのは大きいのかなと思うんです。区役所が受ける相談は、今日いろいろ言われましたとおりなかなか難しい御相談が多いわけですけれども、そういう難しい、困難というか、事例に取り組むことによって、いろんな知識とか関わり方とか、胆力というか気持ちのところも一回り大きくなつて、苦労することによってついてくる力量もあると思うので、なかなか大変だとは思うんですが、モデルケースというところで、まずは1事例、一緒にやってみようとか、そういうたったところに少し踏み出していくだけだと。たくさんやってということじゃないと思うんですけど、そういうたった取組の役割からの理解でそう感じました。

山寺課長

ちなみにアダージオさんのほうから、事例の提出もカンファレンスで行っていないみたいな話があったんですけど、実際に日常、事業運営していて、何か困ったことだと、もうちょっと他の関係機関に話を聞いてみたいなどか、そういう例はありませんか。

瀬川委員

特に思い当たるものがないというのも一つありますし、あと、やっぱり時間ぎっちり使ってケースの検討をされていて、尻込みしないで出していいですよというふうに木下さんにも以前言わされたんですけど、ただ、本当に困っている方を出していて、皆さん一つでも多く助言が欲しいと思うんです。そんな中でアダージオの新規でつながった方を出すとい

う勇気が出ません。正直に言いますと。

堀委員 本当、川崎は行き詰まっているケースが……。

瀬川委員 本当にすごく多過ぎて、おこがましいというか。いや、多分皆さん出したら全然検討してくださるというのはもちろん分かっているんですけども、ちょっと出すにはな、と。

江口委員 全然出していいと思いますよ。

瀬川委員 いや、そう言われるんですけど、実際に見ていただけると分かるんですけど、私がもし相談支援センターとして出すとなったとして、やっぱり一つでも多く聞きたいというところで、時間を割いてもらうのは本当に申し訳ないというか。あと、本当に対象者がいないという、事例の重い・軽いというのはないのかかもしれないんですけど。前例をつくるところもなかなか準備からと考えると……。

江口委員 宮前では今、二部制でやっていて、精神保健係だけでやるやつと、地域の人たちもやっていいよという構成なのですが、それも最近は崩していて。このあいだは、第一部精神保健係のケースだけしかやらないところにポポラスさんとかを呼んで事例検討して、第二部ではもう資料もなくフリーで来てもらって、資料を作ってくれればそれはそれだけ、負担なく相談できるようにという形でやってたりします。なので、新規ケース、こんな感じで始めましたよとなったときに、アセスメントのところでもう少しここを聞き取ったほうが今後の支援のところで良いですねみたいな助言をもらうような、そういうものもあつたりとかするので、ケースの重い・軽いで決めてはいけないと思うんですけど、出してもらうと、こちら側としては、よかつた、参加しに来てくれているなみたいなところもあつたりするので、そこは他の人の時間を奪ってしまうというよりは、それこそ行っても他の人の話を聞いているばかりで時間を奪ってしまうことになりかねないかと。本当に気にしないで、というだけだとなかなか厳しいということであれば、精神保健課さんに頑張ってもらって、12月のこの枠はアダージオの枠ですみたいなふうにしてもらったりしても良いのではないかと。本当に気にしないで、というだけだとなかなか厳しいということであれば、精神保健課さんに頑張ってもらって、12月のこの枠はアダージオの枠ですみたいなふうにしてもらったりしても良いのではないでしょうか。

瀬川委員 本当に支援者がついているというところでシンプルなケースとかあまりないんです。

江口委員 その人を巻き込んでしまえばいいんですよ。

瀬川委員 相談支援センターさんが本当に忙しそうで。

事務局 多分アダージオさんが出していただくことで、アダージオでつながっている人はこういう人なんだみたいな、皆さんにも分かっていただいたりとか、こんな人を紹介していいんだというような、イメージ共有にもなると思いますし、かといって、区ごとのカンファの雰囲気の違いはありますから、そこは所長さんの出ていらっしゃるメンバー構成とかもあると思いますので、「試しにこれを出してみようか」みたいなものがあって、区のほうと調整が必要だったら、そこはしますので、そこは遠慮なくおっしゃっていただければと。

- 島津委員 はるかぜも「ない」という言い方も変なんですけど、多分地活の中の人間関係の問題が多過ぎて、事例検討ではない感じなんですよね。
- 江口委員 情報共有のところで「ああ、そうか、こんな感じで地活さん困っているんだな」「こういうことできないの?」「いやいや、できないですよ」みたいなことの、理解は多分深まると思うんです。「そうか、こういう人は合わないんだな」みたいなこととか、そこを具体的に知れるというのは、こちら側としては結構おいしいというか。行って、ずっとその場に2時間、3時間いられないから。
- 島津委員 まあ、そうですね。
- 江口委員 なので、そういう意味で雰囲気を感じ取らせてもらったりとか「こういう人は、じゃあ、つないで大丈夫か」というところの判断基準にもなるので、そこは共有という意味でもありがたいかなと思ったりします。個人的な意見ではありますけれど。
- 堀委員 何か、毎月とかじやなくて、例えば年度の替わりで新しいワーカーさんがついたときに、地活のA型機能とかというのをこういった方がいたときに通えるとか、居場所になるみたいに、今問題がなくても、こういった方だとこういった場が向くという人がいたら、一つの情報提供先としてという、そういうのを精神カンファの時間とかにつくるとか。定期的にとなると、やっぱり日々の業務で難しいかもしれません。
- 江口委員 それ、いいですね。
- 堀委員 新しい職員さんの情報にもなるのかと思って。
あと、A型さんことを全部分からなくとも、こういったタイプの方のどこかないですかとなったら、デイケアだけじやなくてみたいな、選択肢の一つとしてというようなのを、本当に安定して来られているケースの紹介だとか、安定してこられていたけど、こういうふうになると、通所だとか相談にもつながらなくなってきたら、その辺のときには一緒に考えてもらえたたらとか、こういった場のほうが目的も明確になっていて、その中でだんだんと時間を、困っているケースばかりじやなくて、共有する時間の場として考えていけるようなきっかけにもなっていくんじゃないのかなと思います。出すのもプレッシャーで、ただ、目的があった中で気軽に出ていく形になってくれるといいなと。知らない方も、全然違う畠から異動してくる職員さんも、いらっしゃるだろうから。
- 山寺課長 このゆりあすは一応モデルという名前がついていて、本当は全域展開みたいなものが理想なんだろうなという中で、それぞれの区でいろんな形、今、状況になっているのかというのを、まずは共有していただくという形なのかというふうには思っているので、そういう意味では、区ごとにカンファレンスの雰囲気が違うというのは、一つあるのかと思いながらも、あとはどうやって、今言ったように関わりをうまくつくっていくかとか、情報発信とかというのをどうしていくかというところなのかというのは思ったところです。

堀委員 それ、色が違えばしようがないと思うんですよね。区ごとにやっぱり地域性が違うので、南部からだんだん北部に向かっていくほど裕福だったり。その地域性によってやっぱり出てくるケースも違うから、雰囲気が違ってしまうのは案外当たり前かとも思うんですけども。

山寺課長 鈴木委員、何か御意見はございますか。

鈴木委員 いいアイデアだったなど聞かせていただきました。地域性はあるかもしれないけど、モデルの中で出ていっていただくことで、A型が区のほうに紛れていただくことで認知度は上がるし、いろんなケースのやり取りを聞くだけでもいいんですけど、でも、実際、事例を出していただいたほうが職員のスキルアップにつながるのは間違いないとは思います。

これが通常のルーチンの中でやれるようになるのが理想だとは思うので、だから、「モデル」というのをいつ外すのかは今後の議論にはなるとは思います。ただ、全体的な中で行くと、夜間の利用者が減っている中で、夜間の取扱いをどうするのかとか、あと、着地点ですよね。モデルとの着地点をどう整理していくのかは、多分次か次ぐらいのところで考えてアダージオさんがカンファに行って、普通に事例を出して、いろいろやり取りができるというのが当面のゴールになるかというのは、聞かせていただいた中では感じたので、その辺は原島さんがバックアップしてくれるということですね。今、グループスーパービジョンをやっているのですか。

事務局 各区やっています。

鈴木委員 やっているなら、余裕があればそういうところに出るだけでも勉強にはなるし、逆に区のカンファで自分たちの事例でチャレンジしてみるというのは、多分出さないと、それはそれでもったいない話なので、ぜひチャレンジしていただきたいなと思いました。

山寺課長 ありがとうございます。

ほかに委員の皆様、御意見、御質問はございますでしょうか。

それでは本日は以上となります。